

# 多様性、国際化、イノベーション：中小 企業政策の新しい視点



パネル・ディスカッション

専修大学  
伊藤恵子

**2010年2月15日**

# グローバル化の果実を得るのは誰か？

2

- グローバル展開 (輸出入・**FDI**) と国内生産性との正の関係は、広く確認されている。
- 産業レベルの実証分析結果: アジアからの中間財輸入の増加は産業レベルの生産性を上昇させる (**Ito & Tanaka 2010**)
- 企業レベルの実証分析結果: オフショアリングをしている企業の生産性は高い (**Hijzen, Inui & Todo 2006; Ito, Wakasugi & Tomiura 2009**)
- 企業間生産性格差の要因: 規模、国際化の度合い、研究開発 (**Fukao & Kwon 2006**); 国際化と生産性 (若杉他**2008**); 輸出比率の高い産業で企業間格差が拡大 (**Ito & Lechevalier 2009**)
- グローバル化の果実 (= アジアでの生産ネットワークを活用してコストを削減) を得ているのは主に大企業なのか? 中小企業にはその恩恵は及ばないのか??

# グローバル経済における中小企業の可能性

3

- 国際分業によって、海外へシフトするもの：量産化技術、**CAD・CAM・NC**機械などによって代替できる技術
- 海外シフトが難しいもの：企画設計の創造力、データ化するノウハウ、素材に対する知見、高い熟練技能・・・日本の中小企業が有する基盤技術力（山田**2009**） → 基盤技術を高度化し、海外市場開拓を！
- 低所得国からの輸入浸透度が高い産業で、中小企業の売上、雇用の成長率は低い。しかし、その中でも資本集約度や生産性の高い中小企業は売上・雇用の減少を食い止めている（伊藤・川上**2008**）
- どうしたら、グローバル化の果実を得られるのか？

# 『企業活動基本調査』にみる日本の製造業企業の姿 (1)

4

表1. 投資戦略別企業数 (社)

	A	B	C	D	A+B+C+D
	R&Dなし、輸出なし	R&Dのみ	輸出のみ	R&Dあり、輸出あり	合計
1994	5062 (44%)	3537 (30%)	619 (5%)	2386 (21%)	11604 (100%)
2007	5034 (43%)	2705 (23%)	1118 (10%)	2804 (24%)	11661 (100%)
うち中小企業 (300人以下)	4469 (50%)	1936 (22%)	918 (10%)	1500 (17%)	8823 (100%)
うち大企業 (300人超)	565 (20%)	769 (27%)	200 (7%)	1304 (46%)	2838 (100%)

(注1)『企業活動基本調査』の調査対象は、従業員50人以上かつ資本金又は出資金3,000万円以上の会社。

(注2)輸出は、直接輸出と海外支店の売上高の合計である。

# 『企業活動基本調査』にみる日本の製造業企業の姿 (2)

5

表2. 投資戦略の変更(1994-2003年の平均値)

t年における投資戦略 (カッコ内は年平均企業数)	t+1年に投資戦略を変更した企業数				
	R&D開始	R&D中止	輸出開始	輸出中止	退出
R&Dなし、輸出なし (5215)	354 (6.8%)		110 (2.1%)		772 (14.8%)
R&Dのみ (3232)		384 (11.9%)	170 (5.3%)		360 (11.2%)
輸出のみ (796)	129 (16.2%)			79 (9.9%)	110 (13.8%)
R&Dあり、輸出あり (2504)		144 (5.8%)		143 (5.7%)	258 (10.3%)

# R&D開始と輸出開始が生産性成長率に与える影響

6

	R&Dなし、輸出なし	輸出のみ	R&Dのみ
輸出開始後の生産性成長率	輸出開始後 <b>3</b> 年間では、統計的に有意な差は見られない	—	輸出を開始しなかった企業よりも、労働生産性成長率は約 <b>4%</b> 高く、 <b>TFP</b> 成長率は約 <b>10%</b> 高い。輸出開始後 <b>3</b> 年経過しても、高成長率を維持
R&D開始後の生産性成長率	<b>R&amp;D</b> 開始から <b>3</b> 年後には、 <b>R&amp;D</b> を開始しなかった企業よりも約 <b>3%</b> 高い労働生産性成長率を実現。 <b>TFP</b> 成長率については、有意な差は見られない。	<b>R&amp;D</b> 開始後 <b>3</b> 年間では、統計的に有意な差は見られない	—

# まとめ(1)

7

- 中小企業において、輸出と**R&D**を両方行っている企業の割合が低い。
- 輸出をしていない状態から輸出開始に踏み切る企業数は少ない。
- **R&D**のみを行っている企業は数多いにもかかわらず、その多くが輸出開始できない状態にある。
- すでに**R&D**活動をしていて、技術知識の蓄積がある企業が輸出を開始すれば、大きな生産性向上が期待できる。この生産性効果は長く持続する。
- **R&D**開始から生産性効果が顕在化するまでには時間がかかる。
  
- 輸出と**R&D**は相互補完的であり、両方行っている企業の生産性成長率が最も高い(台湾の研究:**Aw他2005**):既存の技術知識を武器に海外市場を開拓することによる生産性の上昇+海外市場とのコンタクトを新たなイノベーションにつなげることによる生産性の上昇=両者の相互作用

## まとめ(2)

8

- 既存の技術知識を活かし、海外での市場開拓に積極的に取り組むことが重要。技術知識の蓄積のある企業は成功の確率が高い。・・・中小企業の海外進出・海外市場開拓への積極的な支援策が必要。
  - 有力な技術知識を持たない企業にとって、グローバル化や国際分業の進展は、大きな逆風となる。・・・これら企業がなるべく早く高度な技術知識を蓄積できるような支援策が必要。産官学の連携、地域内・クラスター内連携など。
  - **Ando & Kimura (2009)**では、東アジアに進出した企業は、国内の雇用も増加させる傾向を見いだしている。
  - 英・独(**Roper & Love 2002**):プロダクト・イノベーションを行っている企業ほど輸出を開始する確率が高い。
  - スロベニア(**Damijan et al. 2008**):輸出はプロセス・イノベーションを促す。
- <輸出とイノベーションの相乗効果の実現が重要>
- <アジア生産ネットワークにおける基盤技術の担い手となる>